

“新たな取り組み”が組織の発達にもたらすもの

—新人看護師研修のあり方と病院とのやりとりをめぐって—

山手香奈（大阪彩都心理センター） 竹田伸子（大阪彩都心理センター）

I. はじめに

私達が、何らかの新たな取り組みを持ち込む時、その“組織”の中では一体どのようなことが起こっているのだろうか。よく、取り組みの実際や、私達の実感や手応えとは離れた所で、組織から、歓迎や批判を受けたり、頼りにされたり、時には無視されたりすることがある。その度、こちらの存在は揺さぶられ、この取り組みが何の意味があるのかと考えることも多い。筆者らは、4年前よりA病院から依頼を受け、外部講師として「新人看護師研修」を実施している。「教育体制」の改革に着手し始めたA病院の“新たな取り組み”の一環であり、この研修の“あり方”をめぐって、病院から様々なものがぶつけられてきた。それは、筆者らの考える研修の存在への問いであったが、同時にその動き自体が、病院が新たな教育体制を受け入れていく作業過程の一端を担っていたように感じる。病院からの様々な反応を中心に振り返り、その意味を考えたい。

II. 事例の概要

A病院は、教育担当専門のB看護師らを配置し、新たな教育体制の改革に着手していた。問題となっていた新人看護師の離職予防を目的として、知識・技能研修を組み込み、メンタル面のサポートが筆者らに依頼された。病院は、メンタル面の処し方を教えるべきだという考えだったが、筆者らは、離職には、劣等感や孤立感、居場所のなさなどの要因が関わっており、新人自らがお互いを支え合う仕組みを作る、ワークを中心にした手法が適しているのではないかと提案した。その提案は受け入れられ、4月から月1回2時間、全8回の継続的な研修が組み込まれることとなった。対象は、入職一年目の新卒看護師で、各々がその時期特有の情緒的体験を探索し、言葉にする事を促せるよう、毎回のワークを工夫した。病院との窓口はB看護師で、様々なやりとりをしながら進めた。

III. 経過

1年目：4月、会場には26人の新人看護師と、物珍しそうに見学に来た数人のベテラン看護師が集っていた。新たな取組みへの期待感と不安感とが入りまじり、緊張感が漂っていた。しかし研修後には、ベテラン看護師から「新人の戸惑いがよく見えた」と肯定的な声が聞かれ、院内全体に歓迎ムードが漂っていた。しかし6月、「なぜまとめて終わらないのか?」「ワークにどんな意図があるのか?」と疑問の声が聞かれ始める。それは批判とも、純粋な疑問と

も受け取れたが、研修の捉え所のなさの不安が表出されている様だった。7月、見学していたベテラン看護師らが、不機嫌さを漂わせる。研修後、「新人はおお客様気分。たるんでる」「あのワークに何の意味があるのか」と不満が上がり、その後、B看護師がベテラン看護師との話し合いの場を設けた所、新人看護師への腹立たしさや、新人教育の負担の大きさが吐露された様だった。その後も研修への不満は聞かれたが、そのあり方は変えないまま1年目を終えた。/2年目：なぜか、一年目のような不満や要求はあがってこなかった。全て受け入れられた訳ではないが、自分達を脅かしはしない存在と認識されたことで、関心が薄れたようでもあった。/3年目：C病院と統合し、新病院へ移転。A病院とC病院とのやり方の違いの擦り合わせに、病院中が係りきりになり、全注目がそちらへ向けられていた。/4年目：早々に休職者が出始める。10月には、初めての離職者が出た。4年目で初めての離職者であり、病院は、それまで積み上げてきたものが崩されるようなショックを受けていた。研修で出された新人看護師の言葉には、「発言をそのままにしておいてよいのか」とB看護師から不満がぶつけられ、改めて今ある形への問い直しながなされているようだった。

IV. 考察

1人1人の情緒的な体験の探索に目的をおいた当研修は、何か一つの「正答」や「まとめ」があるわけではなかった。そのあり方は、「研修とは正解を教える、身につけさせるもの」という価値観にあった病院にとって、これまでの物差しに収まらない、異質なものを「異物」として体験されたように思う。それが刺激となり、結果、院内に渦巻く変化への不安や、各々がもつ考えや価値観を浮き彫りにすることに繋がったと思う。これまで言葉にされることはなかった、院内の考えや価値観が表沙汰になったのである。当初はこちらが既存の物差しに収まるような働きかけがあったが、研修のあり方が変わらなかったことで、訴えは結果院内に帰着し、院内での擦り合わせ作業を促したように思われる。その意味で、当研修のあり方が、新たな教育文化を醸成する過渡期にあった病院組織の発達を促進する、一助となったといえないだろうか。また、異質なものを意味づけようとする動きは、どうか自分たちの中に取り込もうとする動きでもあり、筆者らの新たな取り組みが病院へなじむ為の、器となっていたと思われる。（キーワード：集団力動、器、異物）

「大人の階段のぼってる」と語った女子中学生との心理面接

—問題行動に秘められたものに言葉が添えられていった過程—

坂本 有香（大阪彩都心理センター）

1.はじめに

筆者がスクールカウンセラー（以下SCと記述）として勤めていた中学校で出会ったA子は、小学校時代から引き続き激しい問題行動が特徴的な生徒であったが、3年間のSCのかかわりの中で、次第に自己に向き合うようになり、自己を確立していく思春期のステージを踏みしめるような経過をたどった。そして「うち、大人の階段のぼってる」とカウンセリングの中で笑って言うまでに成長し、無事進路を決めて卒業していった。本稿では、A子の学校生活や筆者とのカウンセリングの経過をたどりながら、A子の心理的な変遷と、A子にとってSCが果たした役割について考察したい。

2.事例の概要

◆A子の歴史：A子は、幼少期から発達をフォローする機関に通っていた。小学校高学年時には校内での問題行動が激しく顕著になったことから、市の教育相談にかかり、その後の継続的な支援を受けていたという経緯がある。

◆家庭について：母、A子、母方祖母の3人家族。A子が3歳の頃に父母が離婚したのを機に、母の実家に戻り、生活している。

中学1年時のA子は、人や物に対する破壊的な行動が目に見える状態で、学校としては、差し当たりこの問題行動への対処が急務とされた。SCと連携した細やかな校内対応と、医療機関受診、服薬の段を経た後のA子は、破壊的な行動は落ち着いたものの、以降は「固まる」「閉ざす」「逃げる」といった行動をみせるようになる。そこで、A子への定期的なカウンセリングが開始された。

3.面接の過程

出会った当初のA子は、制服は腰の所で3回ほど巻き上げたスカートで太いベルトで固定し、髪の毛はカラフルなゴムやピンを多用して、あらゆる箇所を不自然に飾るという校則違反だらけのいでたちであり、特に部活顧問や上級生からの厳しい指導にも耳を貸さない毎日が続いていた。部活動に使う備品や部員の私物を壊したり傷つけたり、活動中に脱走するなど、自他共に危険が及ぶ行動が繰り返され、度重なる話し合いも奏功しなかった。そんな激しい行動に、学校も母親も、A子自身も翻弄されていた。共に食すお弁当は、パウチのマヨネーズを全てのおかずにと点々と忙しくつけ、大きく口を動かし音を立てながら噛むなど落ち着かない食べ方で、また、喋る口調・内容共に大変幼く、文脈なく、思いつくままに近況を報告したり、学校への不満を語るといった様子であった。週1回、

ほぼ毎週重ねてきた面接は、4時間目が終わるとA子が即座にSCの元に飛んで来てお弁当を食べ、大好きなアイドルの話をしながらかつて、昼休みの時間をきっちりSCと共に過ごす形で進んだ。その中で、スカートの“腰巻き”は1回巻きに、髪の毛はシンプルなストレートヘアになり、お弁当のマヨネーズも付けるべきおかずのみ付けて、落ち着いて静かに食べるなど、A子のいでたちや行動が“丸くなって”いった。そして徐々に、SCとの時間の過ごし方を考え、準備してから入室する傾向がみられるようになった。同時に、祖母と自分と母の関係が上手くいかないことによって感情がざわつくことや、それが学校生活の乱れに影響することに言及しつつも、「あれって、老人だから仕方ないことなのかな・・・」「学校休んでやろうかと思ったけど、それはダメだと思って我慢した！」等、気持ちや行動の折り合いの付け方をA子なりに探っている姿も見受けられた。そして、そんな自分について「うち、大人の階段のぼってる」と笑って言った。高校は「坂本先生みたいな人がいる高校がいい」と、SCが配置されている高校に進学先を決め、卒業していった。

4.考察

3年間の月日をかけたカウンセリングの中で、A子の心は移り変わり、SCの存在も意味あるものになっていった。

◆A子の心理的変遷：自身を圧倒してくる手に負えないほどの負のエネルギーを、直接的に表出することしかできなかったA子にとって、『問題を起こすこと』は、そうすることでしか部活動に留まることができなかったと同時に、母の関心を得続けるための手段であったようにも思われる。しかし、カウンセリングの中で本来抱えていた自身の課題に向き合い、それを言葉にする時間を重ねることで、自らの身体や心を扱うことができるようになり、日常生活でも、身なりや言葉で落ち着いてそれらを表現するようになった。

◆A子にとっての『SC』：A子を翻弄し続けてきた形なき『心の感覚』に、A子なりのペースで無理なく向き合えるよう添い続けた。そして、それらの感覚を言葉として紡ぎ出すのを傍らで支えながらも、最後にはA子自身が抱えられるものにして本人の中に戻していく作業を、時には導き、時には見守るという立場で共にした。A子にとってSCは、揺らぎながら大人への階段をのぼる自分を揺らぎなく受けとめ支える、安心の拠り所として存在していた。

（キーワード：中学生の心理、自己表現、スクールカウンセラー）

「可愛いとは思うけど、愛おしいとは思えない」という言葉の意味について

—自閉症児を抱える母との心理面接を通して—

野宮 直美（大阪彩都心理センター）

1. はじめに

A市の保健福祉センターにおいて、筆者(以下、Th.)は当時3歳だった自閉症の女兒(以下、Ch.)とその母(以下、Mo.)と出会った。それまで心理相談や児童相談所を紹介しても拒否的であり、保育所に入所しても欠席が続いている状態であった。母子を何らかの支援につなげるのが急務だったため、当初は療育手帳の取得に向けてケースワーク中心の面接を行っていた。しかし、Mo.の拒否的な態度は変わらなかったため、次第にMo.の心理面接へ移行し、娘が自閉症と診断を受けたことをどう感じているかを深め、健康な娘ではなかったという喪失感を扱う面接を行った。本論では、その中でMo.から語られた「可愛いとは思うけど、愛おしいとは思えない」という言葉を軸に、Mo.の心の動きを考察すると共に、発達障害児支援現場での臨床心理士の職務について考えた。

2. 事例の概要

【Mo.】40代前半女性。シングルマザー。2度の離婚歴あり。1人目の夫との間に男児2人をもうけているが、元夫が引き取っている。2人目の夫との間にCh.をもうけるも生後10ヶ月で離婚。また一度目の離婚の直前に実母を亡くしていた。

【Ch.】5歳女兒 自閉症（中度知的障害でB1療育手帳取得）。有意語なし。社会性、コミュニケーションの幼さが顕著。

3. 事例の経過

第1期：(Ch. 3歳8ヶ月～4歳6ヶ月)

不定期の面接で、ケースワークに重点を置いた関わりを続けていた。医療機関での診断、療育手帳の取得に至り、児童デイサービスに繋がったものの無断欠席が続き、母の拒否的な態度は変わらなかった。Ch.に継続的な支援を提供するためには、なぜ拒否的なのかMo.の気持ちをとらえる事が必要だと考え、面接を月1回の定期的な枠に変更し、Mo.の心理面接へ移行した。

第2期：(Ch. 4歳6カ月～5歳5か月) 心理面接#1～7

最初Mo.は、Ch.ができるようになった事ばかりを弾んだ声で話し、急に保育所に毎日に通いだした。「障害を完璧に受け入れました」という言葉が何度も語られ、躁的な反応が見受けられた。しかし少しずつCh.が自閉症であるが故のMo.の

苦しみや葛藤が語られていくようになり、Mo.から語られた言葉をTh.が一つ一つ扱っていった。そういった中でMo.が最も言いにくそうに、そして恐る恐る語った言葉は「可愛いとは思うけれど、愛おしいとは思えない」であった。Th.はその言葉を折に触れてMo.に投げかけ、Mo.の心の動きをとらえていった。

第3期：(Ch. 5歳5ヶ月～5歳8ヶ月) #8～11

「こんなもんかなと(期待せずに)思っておいて、出来たことを褒めてやれるほうがいい」と語る。出来ないことの多いCh.をどう支えていくかを模索し、就学に向けて冷静にCh.の力を見極め、悩んだ末に特別支援学校へ進むことを決めた。

4. 考察

母との心理面接の中で、Th.は特に「可愛いとは思うけれど愛おしいとは思えない」という言葉の持つ意味と、その言葉に込められた自閉症児を抱えるMo.の心情について考えた。

可愛いという言葉は、他人の子どもにも向けられる感情であるが、愛おしいというのは親特有の感情であろう。しかし、どれだけ必死に育児をしても、視線も合いにくく、自分に愛着を寄せてくれていると確信が持てない虚しさがMo.にあり、その落胆を回避するために「期待をしても裏切られるから期待しない」と心理的に距離をとらずにはいられなかった。Mo.は喪失の多い人生であり、愛おしい実母、愛おしい息子らを喪失し、更なる愛おしい存在を求めて再婚、出産に至ったものの、言葉も喋らない自閉症児だけが残った。自閉症でさえなければというMo.の正直な感情や、またそんな否定的な感情を持つ自分への罪悪感という葛藤も表現されていたと思われる。最後にMo.は、自分亡き後のことも考え、Ch.が少しでも自立した生活を送れるようになるために必要な支援は何かを冷静に見極めた結果、特別支援学校への進学を決めた。発達障害児支援の現場では、障害受容という言葉が蔓延している。本事例を通じて、障害受容が出来ているかどうかだけに目を留めるのではなく、子どもが障害児であるが故の母親の落胆、そして喪失感を扱い母親を支えることで子どもをより良い支援につなげていくことも大切な職務だと考えられた。

キーワード(自閉症児の母・喪失感・障害受容)

自主シンポジウム 2-09

重症心身障害児者にかかわる心理担当者の現状と課題

企画者・司会者：三浦 幸子（心身障害児総合医療療育センター）
話題提供者：斎藤 力（医療福祉センターのぎく）
阿部 瑠子（大阪発達総合療育センター）
荒木千鶴子（心身障害児総合医療療育センター）
山形 明子（心身障害児総合医療療育センター）

「重症心身障害」の方たちのこころの問題は、表出が限られるため把握されにくく、ご家族の心情も複雑で、多職種による協働が不可欠な場であり、さまざまな対応と発想が必要とされています。法令では、重症心身障害児者施設には心理担当者がいることが定められており、全国で200人あまりが従事していると思われま

す。本学会の研修の機会として、「施設心理臨床」「子育て支援」「社会的養護」など、また「遺伝心理相談」「高齢者」「ターミナルケア・グリーフケア」を含めたさまざまな近接領域がありますが、それらとの共通性を確認しながらも、この領域に固有な専門的な視点が必要とされます。

さらに、臨床現場では、「ひとり職場」や前任者がいない場合もあり、まとまった研修の機会が少なく、各担当者

が増加しつつある「発達障害」への対応に追われながら、限られた時間で方法を模索している現状が伺えます。

本シンポジウムでは、以下の問題提起を予定しています。

- ① 2014年度に重症心身障害児者施設で勤務する心理担当者を対象に行ったアンケート（100施設から回答）をもとに、現状と課題を明らかにする。
- ② この分野のこころの問題への対応は、基本的には、心理臨床のさまざまな知見が活用されている現状を確認する。
- ③ さらに、重症であるがゆえに配慮している内容は、心理臨床の他領域にも共通するテーマであり、そのことを「発達障害」領域を例にして考える。
- ④ それらをもとに、今後の研修体制の重要性を提起する。

自主シンポジウム 2-10

上海における臨床実践報告

—特に心理支援を支える現実的な構造に対する、課題と工夫について—

企画者・司会者：服部雅子（大阪彩都心理センター）
話題提供者：小野辺美智子（上海櫻華〈サクラ〉クリニック）
杉谷麻里（新宿メンタルクリニック）
張磊（キューブ・インテグレーション株式会社）
松本順子（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻展開医療科学講座精神神経科）

海外に住む人の支援において、日本での臨床経験はそのまま活かせるものだろうか、それとも別の工夫がいるものだろうか。我々は、上海にある企業やクリニックに所属しながら、在上海の邦人を対象に心理支援を行ってきた。その中で直面した、心理的支援の構造に関する課題と工夫について、皆様と共有する。

当日は、まず上海に住む邦人の生活・特色を概観し、続いて話題提供者からテーマについて報告をする。特に、ニーズのある潜在的クライアントに出会うための方法や、邦人の安心感を支えるための具体的方策など、私たちがまさ

に困ったと感じた場面について問題提起をする。

海外での臨床活動は、一見特殊な要素が多く思えるが、しっかりした構造のない中で、どのように来談者の安心感を保証し、有効な支援を提供するかという、共通する課題を持つ臨床現場は多くあるはずである。当日は“海外”というキーワードに囚われず意見を頂戴し、今後の臨床の手がかりとしたい。